

## 【水の作文大賞】

### 未来を支える地産地消

熊本県 八代市立第八中学校 三年 稲田 侑子

「ただいま。」

私には毎日の楽しみがある。それは、炊飯器の中を確認することだ。炊きたてのご飯はまるで宝石箱だ。見ているだけで幸せな気持ちになる。私の家のお米は、私の住む地域でとれたものだ。つまり、私は毎日、地産地消している。地産地消とは、地域でとれた農作物をその地域でできるだけ消費しよう。というものだ。そうすることで出荷・販売にかかるコストを抑えられたり、安心して新鮮な食材を購入できたりする。また、そうすることで、地域の恵みを守ることができる。「ウォーターオフセット」という言葉を聞いたことはあるだろうか。ウォーターオフセットとは「地下水を育む水で栽培された農作物や、それを食べて育った畜産物を購入・消費することで、地下水保全につながる取り組み」のことだ。熊本の水はほとんどが地下水だ。つまり、ウォーターオフセットの農産物を購入・消費することで、地域の豊み、熊本の地下水を守ることができる。

私が毎日幸せに浸りながら食べているお米は、ウォーターオフセットでつくられたものだ。以前、私はお米農家さんの家へあそびに行つたことがある。八月だったため、山に囲まれていたが、とても蒸し暑かった。そこで、近くの川で遊ぶことになった。川の中には、おたまじやくしやサワガニなど、たくさん生物が住んでいた。川の水は透き通っていて川底の石がキラキラとひかっていた。その隣には、鮮やかな緑の葉の間から、少し離れた稲穂が顔をだしていた。私が川で遊んでいるとき、農家のおじちゃんがずっと田んぼを眺めていたから、私は不思議に思った。だからおじちゃんに眺めている理由をきいた。

「きれいな水がないときれいなお米はできないんだよ。」

と言われ、私は「そうなんだ。」とあまり深くは考えなかった。

しかし、突然私が大好きなお米を食べられなくなった。それは、「令和

二年七月豪雨」だ。いつもお米をつくってくださる農家さんの田んぼも被害をうけてしまったのだ。私が遊んでいた川は氾濫し、川底できらきらとひかっていた石は、田んぼの中に入り、水は汚れてしまった。その時に初めて、私は農家のおじちゃんが言っていたことが分かった気がした。「きれいな水がないときれいなお米はできない。」今回の災害できれいな水ではなくなり、お米がなくなってしまうのだ。

現在は復旧され、私の家ではまた宝石箱のようなご飯が炊けている。

この出来事をきっかけに、私の「水」への見方がかわった。毎日日本中、世界中で使われている水はあたりまえではないということだ。私が住んでいる熊本県は、「水の国」と呼ばれている。それは、豊富な地下水に恵まれているからだ。しかし、今、この地下水が減少しつつある。その理由は、都市化により水田の作付面積の減少を受け、地下水が減少していることだ。そこで、今注目されているのが、ウォーターオフセットだ。ウォーターオフセットの商品を購入・消費することで、地下水保全につながるのだ。水は災害をもたらしてしまうことがある。一方で、水は米などの幸をもたらしてくれることもある。だから、今を生きる私たちは水を守っていく義務がある。水を守るとだけ言われると難しそうに感じるが、私たちは毎日必ず水を使っているはずだ。だから、手を洗うときに使わないのなら水をとめたり、川にゴミを捨てて川を汚さないようにしたり、私たちにできることはたくさんある。また、その中でできることがウォーターオフセットである。地域の食材を買う、地産地消することも地域の水を使うため、水を守ることにつながる。水を守るために自分にできることをして、今ある有限の水を未来へつなげて、支えていきたい。